

# 共産党宣言

カール・マルクス  
フリードリッヒ・エンゲルス  
著

堺 利彦  
幸徳秋水  
共訳

## 凡例

- ・ 底本における旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めている。
- ・ いくつかの語で送り仮名を現代的に統一をした。更に、底本に対し次の変換をした。「リヤザノフ」  
↓「リヤザノフ」、「ダーキン」↓「ダーウイン」、「顛覆」↓「転覆」、「恰も」↓「あたかも」
- ・ ❷で挿入した注記および頁末の脚注は、すべて本PDF作成者による挿入である。
- ・ ルビは、底本では一つだけあるが、他はすべて作成者によるものである。

本PDFは、Karl Marx・Friedrich Engels 共著 "*Manifest der Kommunistischen Partei*" を堺利彦が訳し、戦後彰考書院より出版されたものである。入力データは青空文庫公開のものを利用した。

## 目次

日本訳の序

イギリス訳の序

第一章 ブルジョアとプロレタリア

第二章 プロレタリアと共産主義者

第三章 社会主義および共産主義文書

一 反動的社會主義

A 封建的社會主義

B 小ブルジョア社會主義

C ドイツ社會主義または『真正』社會主義

二 保守的社會主義またはブルジョア社會主義

三 批評的・空想的の社會主義および共産主義

第四章 在野諸政党に対する共産党の地位

## 日本訳の序

この日本訳は、最初、第三章を除いて、週刊『平民新聞』第五十三号（明治三十七【1902】年十一月十三日発行）に載せられたところ、忽ち秩序たちま壊乱かいらんとして起訴され、裁判の結果、関係者はそれぞれ罰金に処せられた。しかしその裁判の判決文には、『古いにしえの文書はいかにその記載事項が不穩ふおんの文字なりとするも、……単に歴史上の事実とし、または學術研究の資料として新聞雑誌に掲載するは、……社会の秩序を壊乱するといふ能あたわざるのみならず、むしろ正当なる行為といふべし』とあつた。そこで私は次にその訳文に多少の修正を加え、および第三章を訳し添えて、今度は『単に歴史上の事実』として、また『學術研究の資料』として、『社会主義研究』第一号（明治三十九年三月十五日発行）に載せた。（その時には、前の共訳者幸徳はアメリカに行つていたので、第三章は私ひとりで訳した。）

しかるに、その『社会主義研究』も程へて後（大逆事件当時）発売を禁止され、その後今日に至るまで、『共產党宣言』日本訳の公刊は不可能の状態になっているが、いかに日本が野蛮国で、いかに保守的反動が強いにしても、もう遠からずして、言論自由の範圍が、せめて明治三十九年當時くらいに復旧する時節は来るだろうと思われる。その時には、私はぜひともこの『學術研究の資料』を出来るだけ早く世に出したいと思つてゐる。ところが、近ごろその古い訳文を読み返してみると、第一、文体の古くさいことが厭で堪らない。それにあの時は、単にイギリス訳から重訳したのもあり、また訳し方の拙いところや、不正確なところや、間違つたところも大いにある。そこで私は今度、その古い訳文をドイツ語の原文と引合せ、また部分的には河上肇氏および櫛田民藏氏の訳文をも参照し、出来るだけ精密に訂正を加えて、口語体に書き直すことにした。幸徳が生きていたら何というか知らんが、私はやはりこの新訳に彼と二人の名を署しておく。

ドイツ語の新版には、一八七二年のマルクス、エンゲルスの序文のほか、一八八三年の一八九〇年のと、エンゲルスの序文が二つ載つてゐる。しかしその内容は次に記したイギリス訳の序に尽くされている。

大正十年五月

堺利彦

（日本では、その後、この私の訳文が何人かの手により、秘密出版として数回発行された。また昨年、大田黒年男<sup>i</sup>氏らの手によつて、『共産党宣言』と題する四百ページの大冊が発行され、禁止にはなつたが、それ以前、少なからぬ部数<sup>i</sup>が頒布<sup>はんぷ</sup>された。この大冊には『宣言』の本文のほか、リヤザノフの『共産主義者同盟』の歴史と、同じくリヤザノフの、二百ページ以上にわたる『評注』と、エンゲルスの『共産主義の原理』——実は『宣言』の草案——等が附録されている。一九三〇年七月追記。堺）

i 大田黒年男、生没不詳。新聞記者、著述家、組合運動家。大正末、福岡日々新聞で支局長クラスであつたらしい。

## イギリス訳の序

この『宣言』は、『共產主義同盟』の綱領として発表されたものである。『同盟』は労働者の団体で、初めはドイツ人に限られ、後、国際的となり、一八四八年以前のヨーロッパ大陸の政治状態の下において、やむなく秘密結社であつた。一八四七年十一月、ロンドンに開かれた『同盟』の大会において、理論上および実践上の、完備した綱領を発表するため、マルクスとエンゲルスとが起草委員に選ばれた。一八四八年一月、その草稿はまずドイツ文で起草され、二月二十四日のフランス革命の数週間前、ロンドンの活版所に送られた。そして一八四八年六月の一揆のすぐ前に、そのフランス訳がパリにあらわれ、一八五〇年ヘレン・マクファアレン嬢の手になつた第一英訳が、ロンドンの雑誌『レッド・レバブリカン』に現れた。オランダ訳とポーランド訳もまた次いで刊行された。プロレタリアとブルジョアとの最初の大合戦たる、一八四八年六月のパリ一揆が敗北した時、ヨーロッパ労働階級の社会的および政治的活動は、また暫く<sup>しばらく</sup>後方に押しこまれてしまった。その後、

權勢の爭奪は、二月革命以前とおなじく、また有産階級の諸党派の間にのみ行われ、労働階級は僅かに政治的自由のために戦うこととなり、中流階級急進派の左翼たる地位に引下げられた。そして独立のプロレタリア運動がなほ多少の生氣を示しているところでは、容赦もなく叩き伏せられてしまった。かくてプロシヤの警察は、当時ケルンにおかれてあつた『共產主義同盟』の本部を捜し出した。それで、本部員はみな捕縛され、十八箇月の監禁の後、一八五二年十月、初めて公判に付された。この有名な『ケルン共產党裁判』は十月四日から十一月十二日まで継続し、被告のうち、七名は三年から六年まで、それぞれの刑期をもつてある要塞に禁錮する旨を宣告された。この宣告の後まもなく、『同盟』は残余の黨員によつて形式的に解散された。従つて『宣言』もそれきり埋没されたもののごとくであつた。

ヨーロッパの労働階級が、更にその権力階級に向つて一撃を加えるべき十分の銳氣を回復した時、かの『國際労働者同盟』が勃興した。けれどもこの『同盟』は、もっぱら欧米全体の戰鬪的プロレタリアを打つて一丸とする目的であつたので、『共產党宣言』に掲げられた趣旨をとつて、直ちにそれを標榜するわけには行かなかつた。すなわちこの同盟は、イギリスの労働組合、フランス、ベ



ルギー、イタリー、スペインにおけるブルードン派、およびドイツにおけるラサール派<sup>(1)</sup>に容認さるべき、漠然たる綱領をもつものでなければならなかった。マルクスはその綱領を起草して右の諸党派に満足を与えたが、彼としては全く、この協同の運動と、相互の討究とから必ず生ずべきはずであるところの、労働階級の智力的発展に信頼していたのであった。資本に対する戦闘の事実、およびその戦況の変遷<sup>へんせん</sup>は、殊に敗戦の場合においては勝利の場合よりも甚<sup>はな</sup>だしく、種々なる家伝秘法の不十分が感知され、従つてまた、労働階級解放の真正の条件について、一そう深奥なる見解に到達させないではおかぬはずである。マルクスの見るところはまさに當つていた。一八七四年、『インタナショナル』が解散した時、それを創立当時の一八六四年に比べると、労働者はまるで別人のようになつていた。フランスのブルードン派、ドイツのラサール派はみな既に死滅<sup>ひんめつ</sup>に瀕<sup>ひん</sup>し、保守的なイギリスの労働組合も（その大部分は疾<sup>と</sup>くにインタナショナルと分離してはいたが）、なおよく漸次<sup>ぜんじ</sup>にその歩みを進め、去年スワンシーでその会長が、組合の名において、『大陸の社会主義もはや我々に恐怖を感じしめぬ』といったほどになつて来た。すなわち實際上、『宣言』の趣旨は著しく各国労働者の間に侵入していたのであった。

(1) ラサルは個人として我々に対する時には、常にマルクスの弟子たることを承認し、従つてまた、『宣言』の論拠の上に立つていた。しかし一八六〇年から六四年までの公の運動においては、彼は、国家の保護を受ける組合工場の要求以上に進まなかつた。

かくて『宣言』そのものも再び表面に現れた。ドイツの原文は一八五〇年以後、スミス、イギリス、およびアメリカで幾度も翻刻され、一八七二年にはニューヨークで英文に訳されて、『ワード・エンド・クラフリン週報』に掲載され、そのイギリス訳からして同地の仏文雑誌『社会主義者』にフランス訳が現れた。その後アメリカで発表された英文の抄訳が少なくとも二種あつて、しかもその一種はイギリスで再版された。また、第一のロシヤ訳はバクーニンの手になり、一八六三年頃、ジュネーブなるヘルチエンの雑誌『コロコロ』の発行所から出版され、第二は女丈夫ウエラ・サスリツチの手になり、一八八二年、同じくジュネーブで出版された。また一八八五年、コペンハーゲン発行の『社会民主主義文庫』の中に、一つの新しいデンマーク訳がある。一八八六年、パリの『社会主義者』にまた一つ新しいフランス訳が出た。そのフランス訳からしてスペイン訳がつくられ、一八八六年マドリッドで出版された。ドイツにおける翻刻は数えきれないほどで、少なくとも

も十二種はあつた。アルメニヤ訳は数月前、コンスタンチノーブルで出版されるはずであつたが、発行者はマルクスの名を冠した書籍を出すことを恐れ、訳者はまたそれを自分の著述とすることを拒んだので、とうとう世に出ることが出来なかつたという。以上のほか、更に他の国語に訳されたものもあると聞いているが、私はまだ見たことがない。かくてこの『宣言』の歴史は、大体において、近世労働運動の歴史を反映している。そして今日においては、この『宣言』こそ疑いもなく、あらゆる社会主義の文書中、最も広く世に行われた、最も国際的な産物であつて、シベリヤからカリフォルニアまでの幾百万の労働者によつて承認された共通の綱領である。

(2) ウエラ・サスリツチ云々はエンゲルスの間違いで、実はプレハーノフによつてロシア文に翻訳されたのである。

しかるにこの『宣言』の起草された時、我々はこれを『社会党宣言』と呼ぶことが出来なかつた。一八四七年の当時では、社会主義者といへば、一方において種々なる空想的諸制度の信者、すなわちイギリスのオーエン派、フランスのフーリエ派などを意味し、その両派とも既に単なる『おかたまり【分派】』の地位に下り、次第に死滅に瀕してゐた。また一方において、社会主義者という名

は種々雑多なエセ改良家を意味し、その連中はあらゆる切り張りの術を説いて、資本と利潤<sup>りじゅん</sup>には何らの危害をも加えないで、よく社会一切の害悪を除去すると称していた。そしてこの両者とも、労働階級以外の運動であつて、むしろいわゆる教育ある人士に向つてその支持を求めていた。これらの間に立つて、単純な政治革命の無力<sup>さき</sup>を悟り、社会の根本的変革の必要を宣言したものが、労働階級中のどれだけの部分であつたかは分らないが、その部分だけは自ら共産主義者と称していた。それはもとより粗雑な、荒削<sup>あらけず</sup>りの、純然たる本能的共産主義ではあつたが、それでもその主張はよく急所に当つて、労働階級の間に有力となり、フランスのカベ<sup>i</sup>ー、ドイツのワイトリング<sup>ii</sup>のような、空想的共産主義を産出していた。そこで一八四七年においては、社会主義は中流階級の運動であり、共産主義は労働階級の運動であつた。また少なくとも大陸においては、社会主義は『品のよいもの』であり、共産主義は全くそれに反していた。そして我々の意見は最初から、『労働階級の解放は、

<sup>i</sup> Etienne Cabet 1788-1856 理想社会を描いた『イカリヤ旅行記』で名を成し、フランス二月革命に参加、のちアメリカ合衆国に渡り共産社会を作ろうと試みる。  
<sup>ii</sup> Wilhelm Weitling 1808-71 ドイツ亡命者団体「義人同盟」(この宣言の共産党の前身)の指導者、ドイツ三月革命に参加、のちアメリカ合衆国に渡り、共産村を作ろうと試みる。

労働階級自身の行動でなければならぬ』というのであったから、この二つの名称のいずれを選ぶべきかについて、疑いの起こるはずがなかった。それに我々は、その後といえども、かつてこの名を排斥したことはないのである。

この『宣言』は二人の合作であるけれども、その核子を形成する根本の提案が、マルクスに属することを明言する義務があると私は思う。すなわちその提案とは、歴史の各時代において、経済上、生産および交換の慣行方式があり、また必然にそれから生じてくる社会組織があり、その時代の政治および文明の歴史はこの基礎の上に建設され、またこの基礎によつてのみ説明されるということ。故に人類の全歴史は（土地を共有していた原始的氏族社会が消滅した以後）階級闘争の歴史であり、搾取者と被搾取者、<sup>あつぷく</sup>圧伏階級と被圧伏階級の対抗の歴史であること。そしてこれらの階級闘争の歴史が進化の諸段階を形成し、それが今日ではまた一つの新しい段階に到達し、この段階では、被搾取被圧伏の階級（すなわちプロレタリア）が、搾取被圧伏の階級（すなわちブルジョア）の権勢から解放されようとするには、それと同時に、今後永久に一切の搾取、圧伏、階級差別、および階級闘争から社会全体を解放するよりほかに道がないということ、である。

私の見るところでは、この提案は、ちょうどダーウインの進化説が生物学に与えたと同様の効果を、史学のうえに与えるべきもので、マルクスと私と二人ともに、一八四五年以前において、漸次それに近づきつつあったのである。最初、私がひとり、いかなる程度までそれに向つて進んでいたかは、私の著『一八四四年における英国労働階級の状態』において、最もよく見ることが出来る。しかるに一八四五年の春、私が再びブリュッセルでマルクスと会つた時、彼は既にそれを完成して、殆んど私が今ここに記しているような明晰な字句で、それを私に提示したのであった。

私はここに、一八七二年のドイツ版に付した我々の合作の序文の中から、左の一節を引用する。

『最近二十五年間において、社会の状態は大いに變化しているけれども、この「宣言」の中に開陳されてある根本の趣旨は、大体において今もなお正確である。細目には所々訂正すべき点もあるだろう。またこの趣旨の實際の適用は、「宣言」中にもいつてあるとおり、すべての処、すべての時において、その現存せる歴史的状态によつて決せらるべきものであるから、第二章の終りに提出されている革命的諸政策には、必ずしも重きをおくに足りない。あの一段は、多くの点において、今日ならばずっと違つた文句で書き現されるであらう。一八四八年以後にお

ける近世産業の長足の進歩、およびそれに伴って進歩し拡大した労働階級の団結から見る時、また第一にはフランスの二月革命における実際の経験、第二にはプロレタリアが初めて二箇月間、政権を握ったパリ・コンミュンの一層よい経験<sup>i</sup>から見る時、この「宣言」中の綱領は、ある細目において既に<sup>はいぶつ</sup>廢物に帰している。特にパリ・コンミュンによって立証された一事がある。すなわち「労働階級は単に出来合いの国家機関を握って、それを自分の目的に使用することは出来ない」（フランスにおける内乱）【マルクス著】を参照。それにはこの点が一そう敷衍<sup>ふえん</sup>されている）ということである。またこの「宣言」の、社会主義文書に対する批評は、一八四七年以前に限られているのだから、現時に關して多くの欠点があることは自明である。また共產主義者と種々の反対党との關係についての評語（第四章）は、その趣旨はやはり正確であるけれど、実際の適用上には既に廢物になっている。今では政治界の形勢が全く変化し、歴史の進歩が、あそこに数えあげてある諸政党の大部分を、地上から一掃<sup>いつそう</sup>しているからである。

しかしこの「宣言」は、今ではもう歴史的文書になっているので、我々はもはやそれに変更  
i 1871.3.18 ~ 5.28 の72日間、パリにおいて普通選挙により自治政府が樹立された。

を加える権利がない。』

このイギリス訳は、マルクスの『資本論』の大部分を訳したサミュエル・ムーア氏の手になり、氏と私と一緒に校訂をなし、私は更に、歴史的用語を説明する二三の注釈をつけ加えた。

一八八八年一月三十日、ロンドンにて

フリードリヒ・エンゲルス



## 共産党宣言

一個の怪物がヨーロッパを徘徊<sup>は徘徊</sup>している。すなわち共産主義の怪物である。古いヨーロッパのあらゆる権力は、この怪物を退治するために、神聖同盟<sup>い</sup>を結んでいる。ローマ法皇もツァールも、メッテルニヒもギゾウも、フランスの急進党もドイツの探偵も。

【訳者注】メッテルニヒ【1773-1859】はオーストリーの宰相、ギゾウ【1787-1874】はフランスの首相。見よ。在野の政党で、在朝の政敵から、共産主義的だといって誹毀<sup>ひき</sup>されない【悪口を言われない】ものがあるか。また見よ、在野の政党で、他の一そう急進的な反対諸党派に対して、ならびにその保守的な政敵に対して、共産主義の焼印をつけた詰責<sup>きつせき</sup>を投げ返さないものがあるか。

この事実から二つのことがわかる。

共産主義はあらゆるヨーロッパの権力者から、既に一個の勢力として認識されていること。

共産主義者が全世界の面前にその見解、その目的、その傾向を公然と表示し、党自身の宣言をも

i ナポレオンを倒して後、ロシア・プロシヤ・オーストリア三国で結ばれた「神聖同盟」に引っかけた皮肉。

って、共産主義の怪物のお伽噺<sup>ときばなし</sup>と対抗すべき時機が熟していること。

この目的のために、諸国の共産主義者がロンドンに集まって、次の宣言を起草した。そしてそれをイギリス語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、フレイミッシュ語<sup>i</sup>、およびデンマーク語で公表することにした。

i Flemish、フランス語ではFlamand フラマン語、ベルギーとフランス北東部で話されていたフランク語の一系統。

## 第一章 ブルジョアとプロレタリア<sup>(1)</sup>

在来一切の社会の歴史は、階級闘争の歴史である。<sup>(2)</sup>

自由民と奴隷、貴族と平民、領主と農奴、ギルド（同業組合）の親方と徒弟職人<sup>(3)</sup>、一言にすれば  
圧伏者と被圧伏者とが、古来常に相対立して、或いは公然の、或いは隠然<sup>いんぜん</sup>の闘争を継続していた。  
そしてその闘争はいつでも、社会全体の革命的改造に終るか、或いは交戦せる両階級の共仆れに終  
るのであった。<sup>ともだち</sup>

（1）ブルジョアとは、近世資本家の階級、社会的生産の諸機関（あるいは諸手段）の所有者、および  
賃銀労働<sup>ちんぎん</sup>の雇用者を意味する。プロレタリアとは、自分で生産機関（あるいは生産手段）をもつてい  
ないので、生活のためには自分の労働力を売るほかはない近世賃銀労働者を意味する。

〔訳者注〕ブルジョアは初め我々によつて『紳士』と訳され、ブルジョアジエは『紳士閥』と訳された。  
そして、プロレタリアは初め『平民』あるいは『平民労働者』と訳された。

（2）精密に言えば、記録された歴史である。一八四七年には、有史以前に存在した社会組織は殆んど

全く知られていなかった。その後、ハクスタウゼン【August von Haxthausen, 1792-1866】はロシアにおける土地共有制を発見し、マウレル【Georg Ludwig Von Maurer, 1790-1872】はすべてのチュートン人種が歴史に入るまえ、土地共有を社会の基礎としていたことを論証し、それから次第に、村落共產制がインドからアイルランドまで到<sup>いた</sup>る処において、社会の原始的形態であること、もしくはあつたことが分かつて来た。そしてこの原始的共產社会の内部組織は、氏の真性質、および氏と種族との関係についての、モルガン【Lewis Henry Morgan, 1818-81】の完成的大発見によつて、初めて標本的の形態で明示された。この原始的共產制の解体とともに、社会はべつべつの、そして遂<sup>つい</sup>には相反目する諸階級に分れはじめたのである。

【訳者注】モルガン著『古代社会』["Ancient society"]およびエンゲルス著『家族・私有財産および国家の起源』を見よ。

(3) ギルドの親方とは、正式の組合員たる職人のことで、組合の頭ではない。

上古の諸時代にあつては、殆んど到<sup>いた</sup>る処に、社会を種々な等級に分けた複雑な排列法【身分制】、社会的地位の種々雑多な区分【社会階層】が行われているのを見る。すなわちローマの古代には、貴族、騎士、平民、奴隸があり、中世には、領主、家来、親方、徒弟、農奴がある。そしてなおその

諸階級の殆んどすべてに、またそれぞれの小区分がある。

封建社会の滅亡から発生した近世のブルジョア社会も、階級対立を除去してはいない。ただ新しい階級をつくり、新しい圧伏条件をつくり、新しい闘争形式をつくって、昔のに代えただけである。けれども、我々の時代、すなわちブルジョアの時代は、この階級対立を単純化したという特徴をもっている。全社会は次第<sup>しだい</sup>々々に、相敵視する二大陣営、直接相互に対立する二大階級に分裂しつつある。すなわちブルジョアとプロレタリアである。

そもそも中世の農奴の中から、最初の都市における特許市民<sup>i</sup>（あるいは廓外市民）が出て来ている。そしてその特許市民の中から、ブルジョア<sup>い</sup>の最初の要素が発達している。

アメリカの発見、喜望峰の廻航<sup>かいこう</sup>は、この新興のブルジョアのために新しい地盤をつくり出した。東インドおよび支那の市場、アメリカの植民、植民地との貿易、交換手段および商品の増加は、商業に、航海に、工業に、空前の刺激<sup>しげき</sup>を与え<sup>あた</sup>、それによつて、既に崩壊しかけていた封建社会内の革命要素に急激な発達を起こさせた。

i 封建領主から直接庇護を受ける都市市民Ⅱ城内市民ではなく、憲章により往来・居住を許された者等を指す。

そこで従来の、封建的もしくはギルド的の工業経営法は、もはや新市場とともに増大するところの需要に應ずることが出来なくなつた。工場的手工業がそれに代わつて起つて来た。ギルドの親方は工場手工業的中産階級のために押しのけられた。種々なる組合と組合との間の分業は、単なる工場内の分業の前に消滅した。

しかるに市場はいよいよ拡大し、需要はいよいよ増加した。工場的手工業もはやそれに應ずることが出来なくなつた。そこで蒸気と大機械が工業生産を革命した。工場的手工業の代わりに近代的大産業が起こり、工場手工業的中産階級の代わりに産業的大富豪、全産業軍の首長、すなわち近代的ブルジョアが起こつた。

この近代産業が世界市場を建設した。アメリカの発見は既にその準備をしていたのである。この世界市場は商業に、航海に、陸上の交通に、絶大の発達をなさしめ、その発達がまた、産業の拡大に逆影響を及ぼし、つまり工業、商業、航海、鉄道の拡大するその同じ度合いにおいて、ブルジョアジーが発達し、その資本が増加し、中世から残存しているすべての階級を後ろの方に押しやつてしまつた。

かくて我々は、近代的ブルジョアジーが、長い発達行程の産物であり、また、生産および交換方法におけるいくた連続せる諸変革の産物であることを知る。

このブルジョアジー発達の各段階は、またそれに相応する政治的進歩を伴っていた。すなわち初めは封建的領主の支配下に抑圧された一階級であり、また武装した自治団体のコンミュン<sup>(4)</sup>であり、あるところでは（イタリーおよびドイツにおけるごとく）独立の都市共和制となり、あるところでは（フランスにおけるごとく）王政治下の第三階級（租税負担階級）となり、次に工場的手工業の時代にあつては、半封建的もしくは專制的王国内における貴族との均衡物となり、また一般大王国の主要なる地盤となり、最後には、大産業および世界市場の発現以後、近世的代議制国家において、全くその掌中に政權を把握した。近世国家の政府なるものは、ブルジョア階級全体のためにその共同事務を処理する委員会に過ぎない。

（４）イタリーおよびフランスの都市の住民は、その都市的共同組織をコンミュンと呼んでいた。そしてそれによって、封建領主から最初の自治権を買い取り、もしくは<sup>ね</sup>振じ取った。

コンミュンとは、フランスの都市がその発生時代からもっている名称で、彼らが第三階級として封

建領主から、地方自治制と参政權とを獲得したその以前、既にこの名称があつた。大体上【一般的に言つて】ここでは、ブルジョアの經濟的發達にはイギリスを標本国とし、その政治的發達にはフランスを標本国としている。

ブルジョアジーは歴史上において、最も革命的な任務を果たしたものである。

ブルジョアジーが政權を握つたところでは、すべての封建的、主従的、牧歌的な諸關係が破壊された。（從來）人を、その生れながらの目上と結びつけていた封建的の色糸は、無残に引きちぎられて、人と人とを結びつけるものは、ただ赤裸々<sup>せきら</sup>の利益、冷酷な現金勘定よりほかには何ものもないことになった。宗教的の熱情や、武士的の感激や、町家的の人情などという神聖な渴仰<sup>かつよう</sup>心は、氷のように冷たい主我的な打算の中に溺<sup>おほ</sup>らされてしまった。個々の人物の値打ちは交換価値の中に消え去り、永く確保された無数の特許的自由の代わりに、ただ一つの無茶な商業的自由が設定された。これを一言にすれば、ブルジョアジーは、宗教的および政治的の幻影をもつて覆<sup>おほ</sup>われた搾取<sup>さくしゆ</sup>の代りに、公然たる、恥知らずの、直接な露骨な搾取を設定したのである。

ブルジョアジーは、従来名譽と尊敬とを博していたすべての職業から、その後光を剥<sup>は</sup>ぎ去つてし



まった。医師も、法律家も、僧侶も、詩人も、学者も、みな彼らに雇われる賃銀労働者に変化されてしまった。

ブルジョアジーは、家族関係からそのしおらしいセンチメンタルなヴェールを破り取って、純然たる一個の金銭関係に引き戻してしまった。

ブルジョアジーは、保守主義者がいたく感嘆している、あの中世時代の蛮勇的行動が、らんぱ懶惰【なまけおこたる】を極めた安逸生活といかに似合いの相棒であるかを明示した。それは実に初めて、人間の活動がどこまでのことをなしとげるかを示したものである。すなわち実にエジプトのピラミッドや、ローマの水道や、ゴチックの堂塔にも優る大工事を起こし、また昔の民族移住や十字軍を凌駕する大遠征を決行したものである。りようが

ブルジョアジーは、生産機関を、従って生産関係を、従ってまた一般の社会関係を、絶えず革命することなしには存在することが出来ない。これに反し、古い生産方法を何らの変化なく保存することが、前代におけるすべての工業階級の第一の生存条件である。故に、生産の絶えざる革命、あらゆる社会状態の不断の動搖、永久の不安と擾乱<sup>じょうらん</sup>、それがすなわちブルジョア時代がすべての前代

と異なる特徴である。すべての確立し凝固した諸関係は、それに伴う大切な旧説古伝とともに一掃せられ、すべての新式の事物も、それがまだ固定せぬ前に廃物となつてしまふ。堅牢けんろうなものことごとは悉く気化し、神聖なものは悉く褻瀆せつとくされ【けがされ】、そして人間は遂に自分の生活状態と、自分と同類との関係を、冷静な目で見つめるよりほかはないことになる<sup>i</sup>。

ブルジョアジーは、その生産物のために絶えず市場を拡大する必要があるので、地球表面の全部に迫りやられる【駆け巡る】。それは到いたる処に巢をつくり、到る処に住みつき、到る処に因縁を結ばねばならぬ。

ブルジョアジーは、世界市場の搾取によつて、全国各地の生産および消費にコスモポリタン【世界市民】的性質を附与ふよした。産業の足のしたから国家的地盤を引き抜いて、保守主義者の大なる悲嘆を招いた。古来の国家的産業は既に破壊され、なお日々破壊されつつある。そしてそれに代わる新産業を輸入することは、すべての文明国にとって生死の問題であり、またその新産業は、もはや

<sup>i</sup> 「冷静な目で見」るのは良いことだろう。ここは、聖なるという仮面が剥がれ、素で自分に直面することになった、という意味合いであろう。

内国の原料でなく、最も遠隔した諸地方からの原料に加工し、またその生産物は内国ばかりでなく、世界のあらゆる方面で消費される。昔の、内国産によつて充足された需要の代わりに、今は最遠隔の国土の産物でなければ充足されない、新しい需要が生じている。昔の、地方的国家的の自足と閉居との代わりに、今は諸国民相互の間における、各方面の交通、各方面の依頼が生じている。そして精神的生産もやはりこの物資生産と同じである。個々の国民の精神的作物は、世界共通の所有となる。国民的の偏執【こだわり】と僻見【へきけん】とは、次第々々に不可能となる。そして多数の国民的、地方的の文学の間から、一個の世界的文学が起こる。

ブルジョアジーは、すべての生産機関を急速に改善することによつて、また交通機関を絶えず進歩させることによつて、すべての国民を（野蛮国民をすらも）文明に引き入れる。彼らはその商品の廉価【安価】を重砲として、あらゆる支那の城壁をも撃破した。彼らはまたそれによつて、頑固に外人を憎悪する野蛮人をも降伏させた。すべての国民は、もし滅亡を欲しないならば、ブルジョアジーの生産方法を採用することを余儀なくされる。いわゆる文明を自国に輸入すること、すなわち自らブルジョアとなることを余儀なくされる。これを一言にすれば、ブルジョアジーは自分の影

像に従つて世界をつくるものである。

ブルジョアジーは、地方を都会の支配下に屈せしめた。彼らは都会の人口を、農村に比べて著しく増加させた。そして全人口の多大な部分を、農村生活の愚昧から奪い去った。彼らは農村を都会に屈せしめたと同じく、野蛮国および半野蛮国を文明国に、農業国民をブルジョア国民に、東洋を西洋に従属させた。

ブルジョアジーは、いよいよますます、生産機関（生産手段）の、財産の、および人口の散在を抑止した。人口は集団され、生産機関は集中され、そして財産は少数者の手に集積された。その必然な結果は、政治上の中央集権であつた。べつべつの利害、法律、政府、税制をもつていた独立の諸地方、殆んど単なる聯合に過ぎなかつた諸地方が、一個の国民、一個の政府、一個の法律、一個の全国的階級利益、一個の関税区域に押し堅められてしまつた。

ブルジョアジーは、僅かに百年ばかりの階級的支配の中に、過去一切の諸時代を合したよりも、一そう多量な、一そう巨大な生産力をつくり出した。自然力の征服、大機械、工業および農業における化学の応用、汽船、鉄道、電信、全世界各地の開墾、河川航路の開鑿、呪文をもつて地下から

呼び起こしたような全人口の増殖、——およそこれほどの生産力が社会的労働の胎内に眠っていたとは、いかなる前時代にもかつてその徴候がなかったではないか。

かくて我々は知る。ブルジョアジーの成長の基礎であつたところの、生産および交換機関【交通手段】は、既に封建社会のうちにつくられていたのである。この生産および交換機関の発達のある段階において、封建社会が生産し交換したその諸関係、すなわち農業および工業の封建的組織、これを一言にすれば、封建的財産関係が、既に発達した生産力と、もはや適合しないことになつたのである。彼らは生産を促進しないで、それを妨害することになつた。彼らはまさにいくたの邪魔物になつた。彼らは爆破されねばならないのであつた。そして爆破された。

彼らの代わりに現れたものは自由競争であつた。それと同時に、それに適合する社会のおよび政治的の組織も起こつて来た。ブルジョア階級の経済的および政治的支配も起こつて来た。

これと同様な運動がいま我々の眼前にも行われている。この偉大な生産および交換機関を呼び出したところの、ブルジョア的の生産および交換関係、すなわちブルジョア的の財産関係、すなわち近代のブルジョア社会は、あたかもあの魔術師が、呪文を唱えて地の底からさまざまの魔物を呼び

出しながら、今は既にそれを制御する力を失つたのに似ている。この数十年来の工業および商業の歴史は、近代の生産力が、近代の生産関係に対し、ブルジョアジーとその支配との生存条件たる財産関係に対し、叛逆した歴史に過ぎない。その証拠としては、かの商業恐慌が、一定の期間を隔ててその襲来を繰返し、その一回ごとにますます甚だしくブルジョア社会の全体の存在を脅威している事実を挙げれば足りる。この商業恐慌の際には、現存の生産物の大部分が定期的に破壊されるばかりでなく、その以前につくられた生産力の大部分もまた同じである。またこの恐慌に際しては、過去のあらゆる時代ならばいかにも不道理【不条理】と思われるはずの、一種の社会的流行病、すなわち生産過剰という流行病が発生する。そのとき、社会は突如として、一時的の野蛮状態に返つたように見える。饑饉<sup>ききん</sup>が起こり、大破壊が起こつて、社会一切の生活資料【手段】を杜絶<sup>とぜつ</sup>したかのように見える。工業も商業も悉く破壊されたように見える。それは何故か。ほかでもない、社会があまり多くの文明、あまり多くの生活資料、あまり多くの工業、あまり多くの商業をもつたからである。社会の用を務むべき生産力は、もはやブルジョアの財産関係を促進させる役には立たない。否<sup>いな</sup>、かえつてその財産関係に対してあまりに有力となり、その財産関係のために妨害を蒙ることに

なる。そこで生産力がその妨害を突破するたびごとに、ブルジョア社会の全部を無秩序に陥れ、ブルジョア財産の存在を危くするのである。ブルジョアの諸関係は、自分のつくり出した富を包容するのに、あまり狭隘きようあいになつて来たのである。しからばブルジョアジーは何によつてこの恐慌を切り抜けるか。一面には生産力の大額【多数】を強圧的に破壊し、一面には新市場を征服し、および旧市場の搾取を一そう根本的にやる。そうしてどうなるか。それはすなわち、一そう広大な、一そう猛烈な恐慌を準備し、恐慌を防遏ぼうあつする手段方法を極度に減少することになる。

ブルジョアジーが封建制度を転覆てんかくしたその武器が、今はブルジョアジー自身に向けられている。

ただしブルジョアジーは、自分を殺すべき武器を製造したばかりでなく、またその武器を使用すべき人物をつくりだした。すなわち近代の労働者、プロレタリアがそれである。

かくてブルジョアジー（すなわち資本）が発達すればするほど、その同じ比例をもつて、近代労働者の階級（すなわちプロレタリア階級）が発達した。このプロレタリアは、仕事を見つけた間だけ生活することが出来、またその労働が資本を増大する間だけ仕事をもつことが出来る。彼らは自分の身を切売りにするよりほかないもので、他のあらゆる商品と同じく一個の商品である。従つて

競争上の諸変化と、市場内の諸變動とに曝さらされるものである。

プロレタリアの労働は、機械使用の増大と分業とのために、全くその個人的性質を失い、従つてまた労働者の興味を失つた。すなわちプロレタリアは単なる機械の附屬物となり、その機械に対して彼が要求されるところは、ただ最も単純な、最も単調な、最も容易に習得される手業である。従つてその労働者を産出する費用は、ただ僅かにその一身を維持し、およびその種を蕃殖はんしよく【繁殖】させるに必要なだけの生活資料に制限される。しかるに商品の価格は、従つて労働の価格も、その生産費と等しいものである。そこで労働の没趣味が増加すればするほど、それと同じ程度において賃銀は減少する。それにまた、機械の使用と分業とが増大すればするほど、或いは労働時間の延長により、或いは一定の時間内に要求される労働の増加により、或いはまた、機械の運転力の増加等により、その同じ程度において労働の総量が増大する。

近世産業は、族長的な親方の下にあつた小さな職場を、工業資本家の大工場に変更したものである。その工場に詰めこまれる労働者の群は、軍隊的に編成されている。彼らは産業軍の兵卒として、多数の士官、下士官などを有する完全な統御組織の下におかれている。彼らはブルジョア階級、ブ



ブルジョア国家の奴隷であるばかりでなく、機械のために、監督者のために、殊にはその製造家たるブルジョア個人のために、日々刻々、奴隷として使役されている。そしてその専制政治の目的が単に営利であることが明示されればされるほど、その賤しむべく、厭うべく、憎むべきことが甚だしさを加えて来る。

手の労働が熟練と力とを要することが少なくなるに従つて、すなわち近世産業がいよいよ発達するに従つて、男子の労働が女子と小児の労働にとつて代わられる。性の差異と年齢の差異とは、労働階級にとつては、もはや何らの社会的価値をもつていない。彼らはみな等しく労働器具であつて、ただその年齢と性により、使用上に費用の多少を生ずるだけである。

労働者が、既に製造家から搾取されて、その労働賃銀を受取ると、今度はブルジョアジーの他の部分、すなわち家主、小売商人、質屋などが彼に襲いかかる。

従来の中産階級の下層、すなわち小さい工業者、小商人、および小金持、職人と農夫、すべてこれらの諸階級は漸次【だんだん】プロレタリアに陥る。その原因の一半は、彼らの小資本が大産業の経営に引き足りないで、より大なる資本家との競争に負けるからであり、また他の一半は、彼らの

専門技術が新しい生産方法に対して無効になるからである。かくてプロレタリアは国民のあらゆる方面から徴募ちようぼされている。

プロレタリアートは種々な発達の段階を経過する。彼らのブルジョアジーに対する戦いは、その存在とともに始まる。<sup>i</sup>

最初は個々の労働者が、次には一工場内の労働者が、次には一地方における一労働部門の労働者が、直接に彼らを搾取する個々のブルジョアに対して戦う。彼らはまだブルジョアの生産関係に対して攻撃を向けるのではなく、生産器具そのものに対して攻撃を向ける。すなわち彼らは外国の競争品を破壊し、機械を叩きたたこわし、工場を焼き払う。彼らは既に亡びた中世労働者の地位を取り戻そうとする。

この段階にあつては、労働者はまだ全国に散在して、競争のために分裂しているところの集団である。当時、労働者が多数団結の実を示した場合があるのは、それはまだ彼ら自身が結合したのではなく、ブルジョアジーの結合した結果である。ブルジョアジーとしては、自分の政治上の目的を

<sup>i</sup> 底本ではこの次に改行が入っていないが、原書ではここで改行されている。

達するために、全プロレタリアートを動かす必要があり、そして、一時はそれをなしうるのである。故にこの段階にあつては、プロレタリアは自分の敵と戦わないで、自分の敵の敵と戦う。すなわち専制王国の遺物、大地主、非工業的のブルジョア、小ブルジョアなどと戦う。かくて歴史的運動の全部はブルジョアの手に集中され、それによって獲得されるすべての勝利は、ブルジョアの勝利である。

しかるに産業の発達とともに、プロレタリアはその数を増加したばかりでなく、ますます大なる集団に押し堅められ、従つてその力が増大し、また彼らがその力を感知する。機械が次第々々に労働の差異を消し、殆んど到る処において、賃銀を同一の低い水準に引下げると同時に、プロレタリアの利害、プロレタリアの内部における生活状態が次第々々に平均して来る。ブルジョア同志の間におけるますます激烈な競争、およびそれから生ずる商業恐慌が、いよいよ労働者の賃銀を動搖させる。不可避の勢いをもつてますます急激に発達する機械の改善が、いよいよ労働者の全生活を不安にする。個々の労働者と個々の資本家との衝突が、次第々々に両階級の衝突たる性質を余計に帯びて来る。そこで労働者は資本家に対して組合をつくりはじめ。彼らは労働賃銀を維持するため

に結合する。彼らは臨機<sup>レキ</sup>の反抗運動のために、かねてその資力を養うべく、永続的の団体を組織する。それがおりおりは破裂して一揆となる。

労働者はおりおり勝利を得るが、それはただ一時的に過ぎない。彼らの闘争の眞の效力は、その直接の結果にあるのではなく、ただ労働者の団結が絶えず拡大するところにある。労働者の団結は、大産業がつくり出した交通機関の発達によつて助長される。交通機関の発達は、諸地方の労働者をして互いに聯絡をとらしめる。ただこの聯絡のおかげで、到る処に同性質を有する無数の地方的闘争が、一個の全国的闘争、一個の階級闘争に集中される。そして階級闘争は必ず政治的闘争である。もしこれが、あの道路の不便な中世の町人であつたなら、こういう団結のためには数百年を要したであろうに、鉄道のある近代のプロレタリアは、僅々数年の間にそれを成就<sup>じょうじゆ</sup>したのである。

プロレタリアートのこういう階級的組織、従つてまたその政党組織は、また絶えず労働者自身の間の競争のために破壊される。けれども、それは必ずまた勃興<sup>ぼつこう</sup>して、一そう強く、一そう堅く、一そう有力となる。彼らはブルジョアジーの間における競争を利用して、労働者の特殊の利益に対する立法的認識を強要する。イギリスにおける十時間労働法のごときがすなわちそれである。

旧社会における一般の諸衝突は、また種々の点においてプロレタリアの発達を促す。ブルジョアジーは不斷の闘争の中に立っている。初めは貴族と戦い、後には産業の進歩と利害を異にする、ブルジョアジー自身の他の部分と戦い、また常にあらゆる外国のブルジョアジーと戦う。こういういろいろの闘争において、ブルジョアジーはプロレタリアに訴え、その助力を借る必要があるので、従つてプロレタリアを政治運動に引きいれねばならぬことになる。故にブルジョアは自分の教育的要素、すなわち自分と戦うべき武器をプロレタリアに供給することになる。

また、前にいったとおり、支配階級の一部分が、産業発達のために、挙こつてプロレタリアに落ち込む。或いは少なくとも、その生活条件を脅威される。彼らがまた多量の教育的要素をプロレタリアに附与する。

最後に、この階級闘争がいよいよ決戦の時期に近づく時には、支配階級の内部（すなわち旧社会全体の内部）における分解の過程が、すこぶる激烈大胆な性質を帯び、支配階級の一小部分は自らその所属を脱して、革命階級（すなわち将来をその手の中に握っている階級）に投ずる。故に、むかし貴族の一部分がブルジョアに投じたと同じように、今はブルジョアの一部分、殊にこの歴史的運

動の全体を学理的に理解しうるに至ったところの、思想家的ブルジョアの一部が、プロレタリアに投ずる。

今日、ブルジョアと対立しているすべての階級の中で、ただプロレタリアのみが真実の革命階級である。他の諸階級は大産業のために衰頹<sup>すいた</sup>し、滅亡するものであるが、プロレタリアはすなわち大産業に特有な産物である。

中産階級の下層たる、小製造家、小商人、職人、農夫等もまたみなブルジョアジーと戦う。けれどもそれは、中産階級としての滅亡を免れんがために戦うのである。故に彼らは革命的でなく、保守的である。いなむしろ彼らは反動的である。彼らは歴史の車輪を後ろにまわそうとするものである。もし彼らが革命的であるとすれば、それは彼らがプロレタリアに落ちこみかけていることを悟ったからである。彼らは現在の地位を防衛するのではなく、将来の利益を防衛するのである。すなわち彼らはプロレタリアの地位に立つために、自分の特殊な地位を棄てるのである。

ルンペンプロレタリア、すなわち旧社会の最下層にある、腐敗墮落した貧民もまた、場合によつ

i Bourgeoisideologen`ブルジョアイデオログ..ブルジョア思想家。

てプロレタリアの革命運動に誘い込まれるだろう。けれども彼らの生活状態から見ると、彼らはむしろ喜んで反動的陰謀のために買収されるだろう。

旧社会の生活条件は、今は既にプロレタリアの生活条件の中に滅却<sup>めつぎやく</sup>されている<sup>i</sup>。プロレタリアは無財産である。彼らがその妻子に対する関係は、もはやブルジョアの家族関係と少しの共通点をもっていない。近世的工業労働、資本の下における近世的屈従は、イギリスはフランスに同じく、アメリカはドイツに同じく、すべてプロレタリアからその国民的特徴を剥ぎ去<sup>は</sup>つてゐる。法律、道徳、宗教、彼らにとつてはみな悉くブルジョアの偏見であつて、その背後には必ず、それだけのブルジョアの利益が隠されているのである。

従来、政權を握つたすべての階級は、全社会を自分らの収益条件に屈従させて、そして自分らの既得の地位を確保しようとした。しかるにプロレタリアは、従来の自分の所得方法（従つてまた、従来一般の所得方法）を廃止して、初めて社会的生産力を握ることが出来る。プロレタリアは自分のものとして保護すべきものが一つもない。彼らはただ、あらゆる従来の、私有的保証、私有的保証*i* 'vernichted in' 無くする、根絶・消滅。英訳 'are swamped'、沈没する、身動きできなくされる。

護を破壊すれば足りるのである。

従来すべての運動は、みな少数者の運動、もしくは少数者の利益のためにする運動であつた。プロレタリアの運動は、大多數の利益のためにする、その大多數の独立の運動である。しかるに、現社会の最下層たるこのプロレタリアは、外面の正式社会を構成しているところの、上層全部を空中に吹き飛ばさなくては、自立し自営することが出来ないのである。

プロレタリアートのブルジョアジーに対するこの闘争は、形式上（実質上はそうでないが）、最初は一国的である。各国のプロレタリアートは、必ずまず、自国のブルジョアジーを処分せねばならぬのである。

我々は今、プロレタリアートの発達について、その最も一般的なる諸段階を叙述し、現社会の内部における、大なり小なり覆面された内乱から、遂にそれが爆破して公然の革命となり、ブルジョアジーを転覆してプロレタリアートの支配を樹立するところまで到達した。

従来すべての社会は、前に述べたとおり、圧伏階級と被圧伏階級との敵対の上に立っていた。けれども一階級を圧伏するためには、その階級が少なくとも奴隸的存在を続けうるだけの、ある生



活条件が保証されてあらねばならぬ。農奴は農奴制の下において、その村邑そんゆうの公民に立身りしんすることが出来たし、小町人【小ブルジョア】はまた、封建的専制政治の抑圧のもとにあつて、ブルジョアになることが出来た。しかるに近世の労働者は、産業の進歩とともに向上するのではなく、却つて自分の階級の生活条件より以下にだんだん深く沈んで行くのである。すなわち労働者は貧民となり、貧民は人口と富との増加に比し、一そう急速に発達する。そこでブルジョアジーがなお永く社会の支配階級となること、そしてその階級の生活条件を定法じようほうとして社会に強いることの不当が明瞭となる。彼らが支配者たるに不当な所以は、すなわちその奴隷制の内部において、奴隷に生存そのものをすら確保することが出来ないという点にある。また彼らが奴隷から養われるのではなく、却つて奴隷を養わねばならぬほどの境遇に、奴隷を沈ませるのやむなきに至つた点にある。社会はもはやブルジョアジーの下に生活することが出来ない。換言すれば、ブルジョアジーの生活はもはや社会と両立しえないのである。

ブルジョア階級の存在、およびその支配権の根本条件は、私人の手の中に富を集積することである。  
i 'der Kommune' コミュニーンの一員になること。前出の「特許市民」への道があるという意であらう。

る、資本の形成および増大である。そして資本の条件は賃銀労働である。そして賃銀労働は全く労働者間の競争の上に立っている。しかるにブルジョアジーが無意識に、そして無抵抗に促進した産業の進歩は、競争による労働者の孤立を改めて、協力による彼らの革命的結合をつくる。だから大産業の発達には、ブルジョアジーが生産をなし、産出物を領有するその基礎自体を、ブルジョアジーの足の下から引き抜くものである。故にブルジョアジーが産出するものは、第一に自分の墓掘り人である。ブルジョアの没落と、プロレタリアの勝利とは、共に不可避である。

## 第二章 プロレタリアと共産主義者

共産主義者は一般のプロレタリアに対して、どんな関係にあるか。

共産主義者は労働者の諸党派に反対して、別個の一派派をつくるものではない。

彼らは全プロレタリア階級の利害から分離した、何らの利害をもつものではない。

彼らは特殊の原則を定めて、プロレタリアの運動をその型に入れようとするものではない。

共産主義者が、プロレタリアの他の諸党派と異なるところは、ただこれである。すなわち、一面においては、プロレタリアの種々なる一国的闘争に対して、その国籍から独立した、全プロレタリア階級の共通利益を指示し、標榜する。ひょうぼうそして他の一面においては、プロレタリアとブルジョア之间的闘争が経過する種々なる発展段階に対して、常に運動全体の利益を代表する。

故に共産主義者は、一面、実際上には、全世界の労働諸党派の中において、最も大胆な、いつでも全党を推進させる一部分である。そして一面、理論上には、プロレタリア運動の条件、進路、お

よびその総結末に関し、プロレタリアの他の大部分よりも、一そう明晰な洞察をもっているものである。

共産主義者の直接の目的は、他のすべてのプロレタリア諸党派のそれと同一である。すなわちプロレタリアを一階級に結成すること、ブルジョアの支配権を転覆すること、プロレタリアの手に政權を握ること。

共産主義者の理論的根拠は、決して某々社会改良家たちの発明し、もしくは発見した、理想や原理の上に存するものではない。

彼らはただ、現存せる階級闘争の實際的諸関係、すなわち我々の眼前に起こりつつある歴史的運動の、一般的表現に過ぎない。従来の財産関係を廃絶することは、必ずしも共産主義者の特徴ではない。

あらゆる過去の財産関係は、絶えず歴史的の転換を受け、また絶えず歴史的の変化を蒙っている。例えばフランス革命は、ブルジョアの財産の便宜のために、封建的財産を廃絶した。

故に共産主義の特徴とするところは、一般財産の廃絶ではなく、ただブルジョア財産の廃絶であ

る。しかし近世ブルジョアの私有財産は、階級反目の上に立ち、少数者による多数者の搾取の上に立つところの、生産および生産物領有方法の、最後にしてかつ最も完全なる表現である。

この意味において、共產主義者はその理論を一言に約することが出来る。いわく、私有財産の廃絶。世人は我々共產主義者を非難している。共產主義者は、人が自己の労働によつて獲得したところの個人的財産を廃絶しようとする。すなわちあらゆる個人的自由、活動、および独立の根底たる財産を廃絶しようとする、と。

自己の労働によつて、自己の獲得した、自己の儲けだした【自分で儲けた】財産といふのか。それはブルジョア財産の以前にあつた、職人【小ブルジョア】の財産、農夫【小農民】の財産のことをいふのか、それならば我々が廃絶するには及ばない。産業の発達が既にそれを廃絶し、なお日々廃絶しつつある。

それとも彼らは、近世のブルジョアの私有財産のことをいふのか。

しかし、賃銀労働（すなわちプロレタリアの労働）は労働者のために財産をつくるのか。決してつくらぬ。それはただ資本をつくる。資本は賃銀労働を搾取する財産である。そしてそれが更に

賃銀労働をつくり、更にそれを搾取するという条件の下においてのみ、増大しうるものの財産である。現今の形態における財産は、資本と賃銀労働との対立の中に生存している。我々をしてこの対立の両面を<sup>けん</sup>検せしめよ【<sup>あたい</sup>検めさせよ】。

資本家たることは、生産界において、単純なる個人的地位をもつばかりでなく、また一の社会的地位をもつことである。資本は協力的産物である。多数部員の共同作業によつてのみ、いな、それを究極すれば、社会全員の共同作業によつてのみ働かされるものである。

故に資本は決して個人的の力でなく、一つの社会力である。

故に資本が共有財産（すなわち社会全員の財産）に変更される場合、それは個人的財産が社会的財産に変更されるのではない。ただその財産の社会的特質が変更されるのである。すなわち財産の階級的性質が失われるのである。

次に賃銀労働を検せしめよ。<sup>i</sup>

賃銀労働の平均価格は、労働賃銀の最低である。すなわち、労働者が労働者としての生命を保つ

i 原書では単に「Kommen wir zur Lohnarbeit:」次に賃銀労働を見よう:」

に必要なだけの生活資料の額である。故に賃銀労働者が自分の労働によつて獲得するところは、ただその赤貧の生活を再製するに足るだけのものである。我々は決して、この直接な生命の再製のためにする、労働産物の個人的所得を廃絶しようとするのではない。すなわち他の労働を支配すべき何らの余剰を生じないところの、この所得を廃絶しようとするのではない。我々はただこの所得の悲惨な性質、すなわち労働者が資本を増大するためにのみ生活し、支配階級の利益がそれを要求する間だけ生活しうるといふ、その悲惨な性質をなくしようとするのである。

ブルジョアの社会にあつては、生きた労働者は、ただ、集積された労働を増大する一つの手段になる。共産主義の社会にあつては、集積された労働が、ただ労働者の生活を拡大し、豊富にし、増進させる手段になる。

故にブルジョアの社会にあつては、過去が現在を支配し、共産主義の社会にあつては、現在が過去を支配する。ブルジョアの社会にあつては、資本は独立的であり、个性的であるのに、生きた人間は従属的であり、非个性的である。

i 「集積された労働」＝蓄積された労働。つまり、それはブルジョア社会では資本主義的財として現象する。

しかるにブルジョアジーは、こういう諸關係の廢絶を目して、個性の廢絶！ 自由の廢絶！ といふのである。しかし無理もない。これはいかにも、ブルジョアの個性、ブルジョアの獨立、ブルジョアの自由の廢絶なのである。

現在のブルジョアの生産關係の下にあつては、自由とはただ自由貿易を意味し、自由売買を意味している。

しかし売買ということがなくなれば、自由売買もなくなつてしまふ。一体、ブルジョアの自由売買ということ、およびその他一切の自由よばわりは、中世時代の制限された売買、束縛そくばくされた商人に対してこそ意義もあるが、共產主義が主張する売買の廢絶、ブルジョア的生産關係の廢絶、およびブルジョアジーそのものの廢絶に対しては、何らの意義もないものである。

諸君は、我々が私有財産を廢絶しようというのに驚いている。しかし諸君のこの現在の社会において、人口の十分の九は既に私有財産を失つてゐるではないか。そしてそれが（少数者のために）存在しているのは、実にそれがその十分の九のために存在していないからではないか。故に諸君が我々を非難する、その財産の廢絶というのは、社会全員の大々多数の無財産を必要条件とする、そ



の財産の廃絶なのである。

要するに諸君は、我々が諸君の財産を廃絶しようとするのを非難するのである。いかにも我々はそれを欲するのである。

諸君は、労働がもはや資本に変えず、貨幣に変えず、地代に変えず、つまり独占的社会力に変じえないことになるその瞬間から、すなわち個人的財産がもはや、ブルジョアの財産に変形しえないことになるその瞬間から、諸君は個性が廃絶されるというのである。

故に諸君は白状しているのである。諸君のいわゆる個性とは、ブルジョア以外の、ブルジョアの財産所有者以外の、何ものをも意味していないのである。そして、それらの個性はもとより廃絶すべきである。

共產主義は誰人<sup>たれびと</sup>に対しても、社会的産物を獲得する力を奪うものではない。ただその獲得によつて、他の労働を屈服させる、その力を奪うのである。

ある者は反対<sup>たいだ</sup>している。私有財産が廃絶されるなら、それとともに一切の活動が廃絶され、従つて一般的怠惰<sup>たいだ</sup>に陥るであらう、と。

もしそうとするなら、ブルジョア社会は疾くの昔、怠惰のために滅亡してゐるはずである。ブルジョア社会では、働く者は儲からないし、儲ける者は働かないではないか。だからこの反対論は結局、資本がなくなれば賃銀労働がなくなるという、分かりきつた重複語を、別の意味で使つたに過ぎない。

物質的産物に対する、共產主義的の獲得方法および生産方法に向けられたすべての攻撃は、更に精神的産物の獲得および生産にまで延長されている。階級的財産の廃絶が、ブルジョアにとつて、生産そのものの廃絶であるのと同じく、階級的文化の廃絶は、彼らにとつて一般文化の廃絶と同意義である。

彼らがしかくその消滅を悲しんでいる、その文化なるものは、大々多数の人にとっては、ただ機械として働くことの教育【Heranbildung, 育成・訓練】である。

しかし諸君が、自由、文化、権利等に関する諸君のブルジョア的見解を標準として、ブルジョア財産の廃絶を律しようとする間は、論争は無益である。諸君の思想そのものは、ブルジョア的の生産関係および財産関係の産物である。それと同じく、諸君の権利もまた、諸君の階級的意志を法律

としたものに過ぎない。そしてその意志の内容は、諸君の階級の物質的生活条件から生じたものに過ぎない。

諸君の利己的謬想【誤想】——すなわち諸君の生産関係および財産関係は、生産の進歩に従つて生滅する歴史的関係であるのに、それを永劫の自然法および道理法に変更させる——その諸君の利己的謬想は、すべての滅亡した過去の支配階級が、みな諸君と同じくもっていたものである。諸君が古代の財産に対して理解したところ、また封建的財産に対して理解したところのものを、諸君はいま、ブルジョアの財産に対しては理解しようとしないのである。

家族制の廃絶！ 共產主義者のこの不名誉な提案に対しては、最急進派の人々すらも憤激する。

しかし、現在の家族制度、ブルジョアの家族制度はいかなる基礎の上に立っているか。資本の上、私収入の上に立っている。完全に発達したこの家族制度は、ただブルジョアジーの間にのみ存在している。そしてプロレタリアの強制的無家庭と、公娼制度とが、その補足物になっている。

ブルジョアの家族制は、もとよりこの補足物の消失とともに消失する。そして両者とも、資本の消失とともに消失する。

諸君はまた、子供に対する親の搾取を廃絶するものとして、我々を攻撃するか。我々は甘んじてその罪人たることを自認する。

しかし（と諸君はいうだろう）、家庭教育を廃して社会教育をそれに代えるのは、最も神聖なる家族関係を廃絶するものである、と。

ところが、諸君の教育もやはり社会によつて決定されるのではないか。諸君が教育を施す<sup>ほどこす</sup>その社会的諸関係によつて決定されるのではないか。学校などを通じて、直接間接に行われる社会の干渉によつて決定されるのではないか。共産主義者は、教育に対する社会の影響を発明したのではない。彼らはただその影響の性質を変じて、教育をして支配階級の勢力から脱出させようとするのである。

家族制度や教育のことについて、また親子の間の神聖な関係などということについて、ブルジョアがこんないいわけをしているとき、大産業の結果として、プロレタリアの家族関係がだんだんに破壊され、その小児たちが単純な商品と労働器械とに変形されて行くのを見ると、我々は実に嘔吐<sup>おうと</sup>を催すの感がある。

だつて君ら共産主義者は、婦人の共有を行おうとしているのぢやないかと、全ブルジョアジーが

我々に向つて合唱的に絶叫する。

ブルジョアは自分の妻を単なる生産器具と考えている。そして生産器具がみな共同に利用されると聞いたのだから、その共同利用の運命が、やはり婦人の上にも来るものとしか考えられないのは、無理もない話である。

共産主義者の目的とするところは、そういう単なる生産器具としての婦人の地位を、廃絶しようとするにあるのだなどとは、彼らがいちもめめないことである。

しかしなんにしろ、わがブルジョア諸君が、そのいわゆる共産主義者の婦人共有制に対して、道徳的義憤を發したことがほど笑うべきものはない。共産主義者は婦人共有制を創設する必要がない。それは疾くの昔から存在しているではないか。

わがブルジョア諸君は、公娼のことはしばらくいわぬとしても、プロレタリアの妻や娘を勝手にして、それでもなお満足が出来ないで、更に自分らの妻を互いに誘惑することを無上の快樂としているではないか。

ブルジョアの結婚は、その實質上、まさに妻女共有制である。さすれば、彼らが共産主義者に対

して加えうる攻撃は、偽善的に隱蔽いんぺいされている婦人共有制の代わりに、公然たる正式の婦人共有制を設けようとするからいけない、というのがせいぜいである。なおいうまでもないことだが、現今の生産関係を廃絶すれば、それとともに、その関係から生じた婦人共有制、すなわち公私の売淫ばいりん制度が、みな消滅するのである。

共產主義者は更に、祖国を廃絶し、国民性を廃するものとして攻撃されている。

労働者は祖国をもっていない。その人のもっていないものをその人から取ることは出来ない。プロレタリアはまず政權を握らねばならぬ、国民的の階級たる地位に登らねばならぬ、自己を国民として結成せねばならぬ。であるから、その意味において、ブルジョアジーの意味とは全く違うが、やはり国民的である。

国家間の差別、および人種間の反目は、ブルジョアジーの發達のために、通商の自由のために、世界市場のために、生産方式およびそれに相應する生活關係の同一化のために、もはやだんだん消滅しつつある。

プロレタリアの政治は一そう多くそれを消滅させるであらう。少なくとも文明諸国間だけの團結

した行動が、プロレタリア解放の最大条件の一つである。

一個人が他個人を搾取することが止めば、それと同じ比例において、一国民が他国民を搾取することも止むであろう。一国の内部における階級対立がなくなれば、国と国との間の敵視もまたなくなるであろう。

宗教的、哲学的、および一般理想的見地からの共産主義に対する攻撃は、大して本気に論究するだけの価値がない。

人間の生活上の諸関係とともに、その社会的諸関係とともに、その社会的生活とともに、その思想、観念、および見解、一言にすれば、その自覚もまた変化するということを理解するのに、そんなに深い洞察力がいるだろうか。

古来、思想の歴史が示しているところのものは、精神的生産が物質的生産とともに変質するということよりほかにないではないか。ある時代を支配する思想は、いつでもただその支配階級の思想であつた。

ある思想が全社会を革命したということがある。それはただ、旧社会の内部に、新社会の要素が

發育したという事実、古い生活關係の解体とともに、古い思想の解体が同一の歩調をとったという事実を指すに過ぎない。

上古の世界が滅亡に瀕したとき、古い諸宗教はみな、キリスト教に征服された。十八世紀に、キリスト教の思想が啓蒙思想（合理思想）に圧せられたとき、封建社会は当時の革命的ブルジョアジ―と致命戦をやっていた。良心の自由、および信仰の自由という思想は、ただ自由競争の優勝を知識界について言明したに過ぎない。

『けれども』と誰かがいうだろう。『宗教的、道德的、哲学的、政治的、法律の諸思想は、いかにも歴史發展の道程において変化したに相違ないが、宗教、道德、哲学、政治、法律は、常にその変化の間に厳存した。』

『それにまた、自由、正義などという、あらゆる社会状態に共通する、永劫の真理がある。しかるに共產主義は、その永劫の真理を廃絶する。宗教、道德を改新するのではなく、全くそれを廃絶する。だから共產主義は、あらゆる過去の歴史發展と矛盾する。』



この難詰<sup>なんぎつ</sup>は一体どういうことに帰着するか。あらゆる過去の社会の歴史は、階級対立の中に発展している。そしてその階級対立は、時代々々に従ってその形態を異にしている。

しかしその形態はいかにもあれ、社会の一部分が他部分を搾取するという一点は、すべての過去の諸時代に共通な事実である。従って、すべての時代の社会的自覚（社会意識）が、その表現の多種多様なにかかわらず、ある共通の形式をもつて働くのは、当り前のことである。そしてその自覚形式は、階級対立の全き消滅とともに、初めて完全に解体すべきものである。<sup>1</sup>

共産主義の革命は、従来の財産関係に対する根本的分離である。従ってその発展の過程において、従来の思想と根本的に分離するのは、当り前である。

しかし、共産主義に対するブルジョアの非難は、もうこれで棄ておくことにしよう。

我々は既に以上において、労働者革命の第一歩が、プロレタリアを支配階級の地位に上げることにあるを見た。すなわち、デモクラシーの戦勝にあるを見た。

プロレタリアはその政治的支配権を利用して、漸々<sup>ぜんぜん</sup>に【次第に】ブルジョアから一切の資本を振<sup>ね</sup>い「…解体するべき」は「ある共通の形式」に係っているのだが、文を後置しているので、少し違和感がでる。

じ取るであろう。一切の生産機関を国家の手に、すなわち支配階級として結成されたプロレタリアの手に、集中するであろう。そして生産力の総量を出来うるかぎり急速に増大するであろう。

もちろん、最初は、財産権に対する、およびブルジョア的生産関係に対する、圧制的侵害によらなければ、右のことは行われえないであろう。従つてその方策は、経済上、不徹底であり薄弱であるかに見える。しかしそれが運動の進行につれて、自然に元の埒外うちがいに跳り出でる。そしてそれが生産方法の全体を変革する手段として、避くべからざる方策となる。

もつともこの方策は、それぞれの国情に従つて、それぞれの差異を呈するであろう。

しかし最も進歩した諸国にあつては、左の諸方策が大抵一般に行使されうるであろう。

一、土地所有権の剥奪はくだつ、および地代を国家の経費に充てること。

二、強度の累進所得税。

三、相続権の廃止。

四、すべての移出民【亡命者】および反逆者の財産の没収。

五、国家の資本をもつて全然独占的なる国立銀行をつくり、信用機関を国家の手に集中すること。

六、交通および運輸機関を国家の手に集中すること。

七、国有工場の増大、国有生産機関の増大、共同的設計による土地の開墾かいこんおよび改善。

八、すべての人に対して平等の労働義務を課すること。産業軍隊を編成すること。（殊に農業に對して）。

九、農業と工業との経営を結合すること。都会と地方との區別を漸々に廃すること。

十、すべての児童の公共無料教育。現今の形式における児童の工場労働の廃止。工業生産と教育との結合等。

かくて、發達の進行につれ、階級的差別が消滅し、すべての生産が、総個人の協力（全國民の大組合）の手に集中されるならば、そのとき公的權力はその政治的性質を失う。元來、政治的權力なるものは、一階級が他階級を圧伏するための組織的強力である。プロレタリアはブルジョアに對する戦闘の必要上、自ら一階級を形成し、革命によつて自ら支配階級となり、そして支配階級として強制的に古い生産關係を廃絶するのであるが、その生産關係の廃絶とともに、階級対立の存在條件を廃絶し、階級全体を廃絶し、従つてまた、自らの階級的支配權をも廃絶するのである。

かくていよいよ、古いブルジョア社会（およびその諸階級と階級対立と）の代わりに、各人の自由な発達が衆人の自由な発達の条件となるような、協力社会が生ずるのである。

## 第三章 社会主義および共産主義文書

### 一 反動社会主義

#### A 封建的社会主義

フランスおよびイギリスの貴族は、その歴史的地位からして、近世ブルジョア社会に反対する小冊子を書くべき任務を帯びていた。一八三〇年七月のフランス革命において、またイギリスの改革運動【選挙制度改革】において、彼らは更にこの厭うべき成り上がり者のために組み敷かれた。本気な政治的闘争はもはや問題にならなかつた。彼らに残されたものは、唯文筆上の争いであつた。しかし、その文筆の方面でも、ブルボン王朝復活時代（一八一四年から一八三〇年まで）の古い言葉ではとおらなくなつた。彼ら貴族が世間の同情を喚び起すためには、自分の利害関係を隠蔽して、ただ搾取されている労働階級の利害関係においてのみ、ブルジョアジーに対する訴状をつくらねばならなかつた。かくて彼らは、新しい支配者を諷刺する【在りもしない悪口をいう】歌を歌い、また多少ともし不祥【不吉】らしい予言をその耳に囁いて、纔かに自ら腹いせをしていたのである。

封建的社會主義はかようにして起つた。半ばは哀歌、半ばは皮肉、半ばは過去の余音、半ばは將來の脅威、そして時には深酷痛烈な批判をもつて、ブルジョアジの腸を刺すことがあつても、近世史の進路を理解する能力が全く欠けていたので、その効果は常にただ滑稽であつた。

彼らは民衆を自分らのうしろに集めるために、プロレタリアの救恤袋【お恵み袋】を旗印として振りかざした。けれども民衆は、しばしばそのうしろに集まつたとき、彼らの背中に昔の封建的紋所を見つけたして、輕蔑の高笑いを残して逃げ去つた。

フランス勤王派の一部と、青年イングランド党とは、この芝居の好適例である。

封建主義者は、自分たちの搾取がブルジョアの搾取とその選を異にしているというが、それは彼らが今日とはまるで違つた、そして今日では時代おくれになつてゐる、事情と条件との下に、搾取をやつてゐたということを忘れてゐるのである。彼らの支配下には、近世のプロレタリアは存在していなかつたというが、それはやはり、近代のブルジョアジが彼らの社會組織の必然の子孫だということを忘れてゐるのである。

それに彼らは、自分たちの批評の反動的性質を殆んど隠してゐない。彼らのブルジョアジに對

する主なる詰責は、ブルジョアジーの支配下には、社会の旧組織を全く引っくり返そうとする一階級が、発生しかけているというに帰着する。

彼らがブルジョアジーを責めるのは、それが一般のプロレタリアをつくりだしたということよりも、むしろ革命的プロレタリアをつくり出したということにある。

故に彼らは、政治上の実際においては、労働階級に対する圧迫的立法に加担し、また日常生活においては、そのあらゆる立派な口上にも似ず、黄金の林檎を拾い集め、真理や正義や名誉を、羊毛や砂糖やジャガ芋酒と交易することを辞しなかった。

〔英訳注〕この林檎のことは、主としてドイツを指したのである。ドイツでは、地方の貴族や郷土が、その領地の大部分を番頭役の者に耕作させて、自らその利益を収め、更にまた大規模の砂糖製造をやり、ジャガ芋酒の醸造をやっていた。イギリスの富裕な貴族は、まだそこまでのことはやらなかったが、それでも、怪しげな株式会社の空株券に名義を貸して地代の減少の埋め合せを知っていた。僧侶がいつでも、封建貴族と手を携えていたと同じく、僧侶的社會主義がまた、いつでも封建的社會主義に伴っていた。

キリスト教の禁欲主義に社会主義的色彩をつけるのは、なによりも容易なことである。キリスト教は私有財産に対し、結婚に対し、国家に対して、熱心に反対したではないか。キリスト教はそれらの代わりに、慈善と乞食と、独身主義と禁欲主義と、僧院生活と教会とを説教したではないか。キリスト教社会主義は貴族の憤怒<sup>ふしぬ</sup>を淨めるために、僧侶が注ぐ聖水である。

## B 小ブルジョア社会主義

ブルジョアジーのために亡ぼされた者、近世のブルジョア社会の中にその生活条件を萎微<sup>いび</sup>【萎靡<sup>ちようろく</sup>】凋落させられた者は、封建貴族階級ばかりではなかった。中世の特許市民と小農階級とは近世ブルジョアジーの先駆であつたが、工商業の發達の遅れた国々では、これらの階級がやはりまだ、新興のブルジョアジーと並んで生きながらえている。

近世的文明の發達している国々では、一つの新しい小ブルジョア階級が形成されている。それは、プロレタリア階級とブルジョア階級との間に彷徨<sup>ほうこう</sup>しているもので、ブルジョア社会の補足的部分として、常に新しく發生している。しかしその組成員たる個人は、絶えず競争のためにプロレタリア



に突き落され、しかもそれが大産業の発達につれ、近世社会の独立分子としては全く消滅に帰し、その代わりに商工農業における労働監督者、および番頭支配人を生ずる時節が近づきつつある。

フランスのような、農民階級が人口の半ば以上を占めている国々では、プロレタリアに味方して、ブルジョアジーに反対する文人らが、小ブルジョア的および小農的の標準でブルジョアジーを批評し、またその小ブルジョアの立場から労働党に加担するのは、まことに自然のことであつた。かくて小ブルジョア社会主義が起こつた。シスモンデー【Jean Charles Léonard Simonde de Sismondi, 1773-1842】はフランスばかりでなく、イギリスにおいても、この学派の巨頭であつた。

この社会主義は最も鋭利に、近世の生産関係における矛盾を解剖した。経済学者の偽善虚飾を暴露した。また最も有力に、機械と分業との破壊作用、資本と土地との集中、生産過剰、恐慌、小資本家と小農との必然的滅亡、プロレタリアの悲惨、生産界の無政府状態、富の分配の驚くべき不均衡【不均衡】、諸国民間における必死の産業戦争、旧習慣、旧家族関係、旧国民性の解体を論証した。

しかしこの社会主義は、その積極の目的においては、昔の生産交換方法とともに、昔の財産関係および昔の社会を復興しようとするか、さもなくば、近世の生産交換方法を、旧財産関係（近世の

生産交換方法によって芻<sup>は</sup>ねとばされたところの、また芻<sup>は</sup>ねとばされねばならなかったところの、その旧財産関係）の外殻の中に、無理に再び押しこもうとするのであった。いずれにしても、それは反動的であり、また空想的であった。

製造工業においては座の制度（ギルドの自治制）、農村においては族長制度【家父長制】、それらが彼らの結論であった。

この学派は、結局、あらゆる自騙陶酔が、曲げがたき歴史的事実の前に霧消して、あはれ意気地なく終焉したのである。<sup>i</sup>

### C ドイツ社会主義または『真正』社会主義

フランスの社会主義的および共產主義的文書は、支配階級たるブルジョアジーの圧迫の下に起こり、その支配権に対する戦闘の文学的表現をなしていたのであるが、その文書がドイツに輸入されたのは、ちょうどドイツのブルジョアジーが、封建的専制政治に対して戦闘を開始した時であった。

<sup>i</sup> 原書は単純で、「後の発展で、この派は、臆病な二日酔いに落ち込んでしまった。」英文は堺訳とも異なるが近い。

ドイツの哲学者、自称哲学者、および文芸家は熱心にこの文書を耽読たんどくしたが、ただ彼らは、その文書がフランスからドイツに移植された時、フランスの社会関係がそれとともに移植されなかったということを忘れていた。そこでこのフランスの文書は、ドイツの社会関係に対して、全くその直接實際的の意義を失い、ただ單純な文学的の姿を示していた。従つてそれは、人間性の實現に関するのんきな学究的思弁となるよりほかはなかった。かくて十八世紀のドイツの学者にとつては、フランス第一革命の要求は、『實踐理性』の一般的要求というだけの意義をもつたもので、革命的フランス・ブルジョアジーの意志表現も、彼らの眼中にはただ純粹の意志、正当の意志、眞の人間の意志の法則としてのみ映じたのである。

そこでドイツの学者たちの仕事はただ、新しいフランス思想を、自分らの古い哲学的良心と調和させるか、或いはむしろ、自分らの哲学的立場からフランス思想を取りいれようというのであつた。この結合はちょうど、翻訳によつて外国語を取りいれるのと、同じやり方で行われた。

昔の僧侶どもが、古代異教国の典籍てんせきによつて、カトリックの諸聖僧の愚伝をつくつたことは、人のよく知るところである。ドイツの学者は、俗界のフランス文書に対して、まさにその反対をやつ

たのである。彼らはフランスの原書に基づいて、自分らの哲学的駄弁を書いた。例えば、貨幣の作用に関するフランス批評に基づいて『人間性の離反』『人間性の外化』を書き、ブルジョア国家に関するフランス批評に基づいて、『絶対普遍政治の廃止』を書いたりした。<sup>i</sup>

こういう哲学的用語をフランスの史的発達の上に当てはめることを、彼らは行為の哲学、真正社会主義、社会主義のドイツ科学、社会主義の哲学的基礎などと命名した。

フランスの社会主義文書および共産主義文書は、かようにして明らかに去勢された。そしてそれらの文書がドイツ人の手の中で、一階級の他階級に対する闘争の意義を失った時、ドイツ人はそれで『フランス的偏見』を去ったと思い、現実の要求でなく真理の要求を代表したと思い、プロレタリアの利益でなく人間性（すなわち一般人間）の利益を代表したと思っていた。しかるにその人間とは、どの階級にも属せず、現実のものでもなく、ただ哲学的空想の雲霧<sup>うんむ</sup>の中にのみ存するものであった。

かように莊嚴な兇戯を試み、売藥的法螺<sup>ほら</sup>を吹き立てたドイツ社会主義も、暫<sup>しば</sup>くにして漸<sup>ようや</sup>くそのi 「外化」はフォイエルバッハ、「廃止」は他のヘーゲル左派を念頭に、即ちかつての Marx-Engels を念頭にしている。

衡<sup>げん</sup>学的な無邪氣さを失った。

ドイツ、殊にプロシヤのブルジョアジーが、封建貴族および専制王政に対する戦闘、すなわち自由主義運動が、次第に本物になって来た。

これによつて、いわゆる『真正社会主義』は、多年要望していた好機会をつかみえて、その政治運動に社会主義的要求を対立させ、自由主義に対し、代議政体に対し、ブルジョアの自由競争に対し、ブルジョアの言論自由に対し、ブルジョアの立法に対し、ブルジョアの自由平等に対して、その伝統的呪詛<sup>じゆそ</sup>を投げつけ、そして民衆に向つては、彼らがこのブルジョア運動のために、得るところは一つもなく、失うところは一切のものであるべきことを説法した。ドイツ社会主義は、このとき、自分が受売りをしているところのそのフランス批評が、近世ブルジョア社会の存在を前提とし、およびそれに随伴する物質的生活条件と、それに適応する政治組織とを前提とするものであることを、折よくも忘れていたのである。すなわちその前提を獲得することが、ドイツでいま漸く問題となつてゐることを忘れていたのである。

故に、ドイツの専制政治およびそれに伴う僧官、教授、地方貴族、官僚などにとっては、この社

会主義は、ブルジョアジーの来襲に対する、まことに格好の案山子<sup>かかし</sup>であつた。

あたかもこの時、ドイツの専制政府は労働階級の動乱に対して、鞭撻<sup>べんたつ</sup>と銃丸のにがい藥を与えた後であつたので、この社会主義は実に甘い口直しであつた。

この『真正社会主義』は、かくドイツ政府のためにブルジョアジーと戦う武器となつたと同時に、また直接に、一つの反動的利益（すなわち特権市民階級の反動的利益）を代表していた。ドイツにおいては、十六世紀以来の遺物であつて、そしてその後たえず、種々の形で復活している小ブルジョア階級が、現存社会状態の特殊の基礎をつくつていたのであつた。

この階級を維持することは、すなわちドイツの現存社会状態を維持する所以<sup>ゆえん</sup>であつた。しかるにブルジョアジーが産業的および政治的支配権を握れば、一方には資本の集中のために、一方には革命的プロレタリアの発生のために、この階級が確かに没落する恐れがあつた。そこで『真正社会主義』は、彼らにとって一石二鳥<sup>たし</sup>を仆<sup>たお</sup>すもののごとく見えた。従つてそれが流行病のように蔓延<sup>まんえん</sup>した。

更にこのドイツ社会主義は、空想の蜘蛛の網で織られ、修辞の花で縁を取られ、濃<sup>こ</sup>やかな感情の露に浸された、浮世ばなれのした衣の中に、その哀れげな『永久の真理』を包んだので、右の人々

の間におけるこの商品の売れ行きは、いよいよ盛んなものになった。

かくてドイツ社会主義は、次第々々に、この特許市民階級の立派な代表者として、自己の使命を認識した。

彼らはドイツ国民をもつて模範的国民となし、ドイツの小市民をもつて模範的人間となすことを宣言した。そしてその模範的人間の醜行しゆうこうに対して、その真相と正反対なる、隠微いんびな、崇高な、社会主義的意義を附与した。要するに彼らの結論は、直接に、共產主義の『残酷な破壊性』に反対し、一切の階級闘争に超越して不偏不党の態度を宣明するにあつた。今ドイツに行われている、いわゆる社会主義文書および共產主義文書は、ごく少数の例外はあるが、みなこの醜穢しゆうがいな骨抜き著作部類に属している。

〔原書注〕一八四八年の革命騒ぎは、すべてこの見苦しい傾向を掃はらい去り、その唱道者から、引続き社会主義者として立つほどの興味を奪い去つた。この傾向の主なる代表者であり、またその根源のタイプたる人は、カルル・グリュン氏【Karl Theodor Ferdinand Grün, 1813-87】である。

## 二 保守的社會主義またはブルジョア社會主義

ブルジョアジーの一部分は、ブルジョア社會の永續を計るために、社會の病所を匡正きやうせいすることを希望する。

經濟學者、博愛家、人道家、労働階級の状態改善者、慈善事業者、動物虐待防止會員、禁酒會員、その他種々雑多の小改良主義者は、みなこれに属している。そしてこのブルジョア社會主義が、また一個の學說につくりあげられた。

それの一例として、ブルードン〔Pierre Joseph Proudhon, 1809-65〕の『貧困の哲學』を挙げることが出来る。この社會主義的ブルジョアは、近世社會の生活條件を欲しながら、その必然の發生物たる闘争と危険とを免れたいのである。彼らの欲するところは、革命のおよび解体的要素を引き去つた現存社會である。彼らはプロレタリアのないブルジョアジーを希望している。彼らはもとより、自分の支配している世界を最善の世界だとしている。ブルジョア社會主義者はこのおめでたい考えを、一つ



の（或いは半分の）学説につくりあげた。彼らはプロレタリアに對し、その学説を實現して、新しいエルサレムに到達せよと勧めているのだが、それは實質上、現在の社会に立ち止まりながら、その現在の社会に関する忌わしい思想を取去れと要求するものに過ぎない。

この社会主義の、一そう非学理的な、しかし一そう實際的な第二形式は、労働階級の利益が政治的变化の中に存せず、ただ物質的生活關係、すなわち經濟關係の変化の中にのみ存することを論証して、それによつて労働階級にあらゆる革命運動を嫌わせようとするのである。しかし、この社会主義がいうところの物質的生活關係の変化とは、決してブルジョア的生產關係の廢絶を意味するのではない。その關係の廢絶は、革命によつてのみなしとげられるものであるから、彼らはただ、その生產關係の地盤の上に行われる行政上の改善を意味するのである。従つてそれはまた、資本と賃銀労働との關係に何らの変化を与えるものでなく、ただかブルジョアジーをして、その支配費用を節減せしめ、その国家財政を單純化せしめるに過ぎない。

故にブルジョア社会主義者は、單純な修辭的形式においてのみ、初めて自分にふさわしい表現に到達する。

労働階級の利益のための自由貿易！ 労働階級の利益のための保護貿易！ 労働階級の利益のための監獄改良！ これがブルジョア社会主義の、最後の言葉であり、ただ一つの真面目に考えられた言葉である。

要するに、ブルジョア社会主義はただ、労働階級の利益のためにブルジョアがブルジョアであるという主張に基づいている。

### 三 批評的・空想的の社会主義および共産主義

我々がここで述べようとするのは、あらゆる近代の大革命に際して、プロレタリアの要求を発言した（例えば、バブーフの著書などのような）文書についてではない。

〔訳者注〕バブーフ【François-Noël Gracchus Babeuf、本名はノエル 1760-97】はフランス大革命の際、一種の共産主義を唱えた人。

一般的動乱の時代、封建社会転覆の時代において、プロレタリアが直接に、自分の階級の利益を

樹立しようとした第一の試みは、プロレタリア自身の発達が幼稚なためと、彼らを解放さすべき物質的条件の欠乏のためとによって、必然的に失敗した。もともと彼らを解放すべき物質的条件は、ブルジョア時代の産物なのである。そこでこの最初のプロレタリア運動に伴った革命的文書は、その内容からいえば必然に反動的である。すなわちその教えるところは一般的の禁欲主義であり、また素朴な平均主義である。

真の社会主義および共產主義学説、すなわちサン・シモン【comte de Saint-Simon, 1760-1825】、フーリエー【Francois Marie Charles Fourier, 1772-1837】、オーエン【Robert Owen, 1771-1858】らの学説が、プロレタリアとブルジョアとの闘争がまだ十分発達しない初期の時代に現れたことは、前に説いたとおりである。（『ブルジョアとプロレタリア』の章参照。）

もつとも、これらの学説の発明者たちも、階級の対立と、ブルジョア社会そのものの中における解体的要素の作用とを看取した。ただ彼らは、プロレタリアの方面において、何らの歴史的独立性を認めず、彼らに特殊なる何らの政治運動を認めなかった。

階級対立の発達は、産業の発達とその歩調を同じくするものであるから、彼らはまだ、幾許も<sup>いくばく</sup>プ

ロレタリヤ解放の物質的条件を見出すことが出来ないで、ただ何らかの社会的の学問により、社会的の法則によつて、その条件をつくろうと試みた。

そこで、社会的の活動の代わりに、彼らの思いつきによる個人的活動が起こり、解放の歴史的條件の代わりに、空想的條件が起こり、プロレタリヤを一階級として、自然に、追々<sup>おおい</sup>と団結させることの代わりに、銘々のつくりあげた社会組織の考案が起こつた。彼らにとっては、将来の世界歴史は、彼らの社会組織案の宣伝と実行とに帰着すべきものであつた。

ただし彼らは、その組織案が、社会の最も痛ましい階級たる、労働階級の利益を代表することをさとしていた。プロレタリヤはただ、最も痛ましい階級という意味で彼らの目に映じていた。

けれども、階級闘争の未発達な形式と、彼ら自身の生活上の地位とのため、彼らは自然に、階級対立の上に超然たるものだと思つていた。彼らはすべての社会構成員のために、その最もよき地位における者のためにすらも、その生活状態を改善しようとした。従つて彼らは不斷に、無差別に、社会全体に対し、いな、殊に支配階級に対して訴えた。人がいやしくも彼らの学説を理解する以上、最上可能の社会に対する最上可能の考案として、それを認めないはずがないというのであつた。

故に彼らは、すべての政治的、殊にすべての革命的行動を排斥した。彼らは平和の方法によってその目的を達しようとした。そして小さな（自然、失敗に帰すべき）実験によって模範を世に示し、その力によって新しい社会的福音の道に進もうとした。

この将来社会の空想的描写は、プロレタリア階級の発達がまだ極めて幼稚であり、従つて自分の地位をもたゞ空想的に考える時代において、社会の一般的改造に対するその最初の予感的渴仰（かつう）から生じたものである。

しかし、この社会主義および共産主義文書は批評的要素をも含んでいる。彼らは現社会の一切の根本を攻撃した。故に彼らは、労働者の啓蒙のために最も価値ある材料を供給した。将来の社会に對する彼らの積極的提案、例えば、都会と農村との對立の廃止、家族制の廃止、私的營利事業の廃止、賃銀労働の廃止、社会調和の宣伝、国家を變じて單純なる生産管理機關となすこと、すべてこれらの提案は、全く階級對立の消滅に帰着するものである。しかし當時にあつては、その階級對立が漸く僅かに發達しかけていたので、彼らはまだその初期の漠然たる、不確定の姿においてのみ、それを知つていたのであり、従つて右の諸提案のものも純然たる空想的意義をもつていた。

この批評的空想的社會主義および共產主義は、歴史的発展と逆行する意義を有している。階級闘争が発達し成形するに従つて、階級闘争に対するこの空想的な超越と、この空想的な攻撃とは、一切の實際的価値、一切の学理的妥当を失う。そこでこの学派の創設者らは、多くの点において革命的であつたけれども、その門弟らはみな反動的分派をつくつてゐる。彼らはプロレタリアの歴史的発展に反対して、その師の旧説を固守<sup>(1)</sup>している。従つて彼らは畢竟<sup>(2)</sup>【要するに】、階級闘争を鈍らし、階級対立を調停しようとする。彼らは今でもやはり、自分らの社会的ユートピアの試験的實現を夢み、個々のファランステール<sup>(3)</sup>を起こすこと、『内國植民地』を設けること、『小イカリヤ村』をつくること、などいう、新エルサレムの小型發行を試み、そしてそれらの空中樓閣を築くためには、ブルジョアジの慈善心と財囊<sup>(4)</sup>【財布】とに哀訴せざるを得ない。かくて彼らは次第々々に、上記の反動的、もしくは保守的社會主義の範疇<sup>(5)</sup>に陥り、ただそれと異なるところは、やや組織的の学理を衡<sup>(6)</sup>うことと、その社会科学の奇蹟的效果に対する熱狂的迷信をもつこととである。

(1)ファランステールとは、フリーエーの考案になる社会的宮殿の名称。【フリーエ自身は呼び掛けだけで、弟子を自称する者たちが運動を起こす。】

(2) 内国植民地とは、オーエンの共産主義的模範社会の名称。【アメリカでは 'home colony' はニューハーフ・モニーという名で実験された。】

(3) イカリヤ村とは、カパーが描き出した共産主義的理想郷の名称。『『イカリアへの旅』という書籍で理想社会を描き、アメリカに渡って建設を試みる。】

故に彼らは、労働階級が一切の政治的運動をなすことに極力反対する。彼らによれば、政治運動はただ、新福音に対する盲目的不信からのみ生ずるのである。

イギリスのオーエン派がチャーチストに反対し、フランスのフーリエ派が改良党に反対するのは、すなわちこの故である。

## 第四章 在野諸政党に対する共産党の地位

既成の労働諸党派に対する共産党の關係、従つてイギリスのチャーチスト、および北アメリカの農民改革党などに対する關係は、第二章の説述で自然に明瞭となつてゐる。

共産党は、労働階級の直接眼前の目的と利益とのために戦うものであるが、しかしその現在の運動の中において、またその運動の将来を代表するものである。フランスにおいては、共産党は社会民主党と提携して、保守党および急進ブルジョア党と戦う。ただし、大革命から伝來した種々の謬見（びやうけんびやうそう）謬想（びやうそう）に対しては、批評の權利を保留している。

(一) この党派は、議會においてはルドリュ・ロラン【Alexandre Ledru-Rollin, 1807-74】によつて、文学においてはルイ・ブラン【Louis Blanc, 1811-82】によつて、日刊新聞においてはレフォルム【La Réforme】によつて代表され、多少社会主義の色彩を帯びた、民主党もしくは共和党の一部であつた。

スィスにおいては、彼らは急進党を助ける。ただし同党が二個の反対せる要素、すなわち一はフランス流の民主的社会主义者、一は急進的ブルジョアジーからなることを見逃してはいない。



ポーランドにおいては、彼らは、農業革命をもつて国民的解放の主要条件とする党派を助けている。この党派は一八四六年、クラカウ一揆<sup>i</sup>を起こさせたことがある。

ドイツにおいては、彼らは、ブルジョアジーが革命的に行動する時、それと提携して専制王政、封建的地主、および小ブルジョアと戦う。

しかし彼らは、未だかつて一刻たりとも、ブルジョアジーとプロレタリアートとが敵対しているという、出来うるかぎり明瞭な自覚を労働者に起こさせることを忘れていない。ブルジョアジーの支配とともに必ず採用されるはずの、その社会的および政治的条件を、ドイツの労働者が、直ちに自分の武器としてブルジョアジーに向けてうるために。またドイツ反動諸階級の没落の後、直ちにブルジョアジー自身に対して戦闘を開始するために。

共産党は主としてドイツに向つてその注意を集中する。ドイツは今、ブルジョア革命の前夜にあり、そしてまたその革命が、ヨーロッパ文明国一般の進歩した条件の下に行われ、なおまた、十七

<sup>i</sup> 十九世紀にはポーランドはロシア・プロシヤ・オーストリアに分割されていた。わずかにクラカウ＝クラクフ地方に自治権があつたが、干渉を強めるオーストリアに対し蜂起がなされた。

世紀のイギリス、十八世紀のフランスよりも、遙に高く発達したプロレタリアを有し、従つて、ドイツのブルジョア革命は、まさにプロレタリア革命の直接の前幕となりうるからである。

要するに、共産党は、到る処において、社会のおよび政治的の現状に反抗する各種の革命運動を擁護する。

すべてこれらの運動において、共産党は常に財産問題を標榜<sup>ひょうぼう</sup>している。その財産問題の発達程度がどうであろうとも、彼らは常にそれを運動の根本としている。

最後に、共産党は到る処<sup>いた</sup>において、万国の民主的諸党派の団結と一致のために努力する。

共産党は、その主義政見を隠蔽<sup>いんぺい</sup>することを恥とする。彼らは公然として宣言する。彼らの目的は、一切従来の社会組織を強力的に転覆することによつてのみ達せられる。支配階級をして共産主義革命の前に戦慄<sup>せんりつ</sup>せしめよ。プロレタリアは、自分の鎖よりほかに失うべき何ものもたない。そして彼らは、獲得すべき全世界をもっている。

万国のプロレタリア団結せよ！

底本：『共産党宣言』彰考書院（初版 1945（昭和20）年12月20日、改訂版 1946（昭和21）年10月25日）  
入力データ：青空文庫から旧字旧カナ版『共産党宣言』より。

作成者：石井彰文

作成日：2015.4.30